

神戸親和女子大学第三回作文コンクール

最優秀賞

頭から離れない「おかえし」

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校

二年 森山ひかる

小学生の時、毎週火曜日の朝自習の時間は、保護者の人が読み聞かせをしてくれる時間でした。私は、その読み聞かせの時間に初めて知った絵本がありました。福音館書店から出版されている「おかえし」という絵本です。

この絵本は、キツネさんとタヌキさんが、頂き物をしておかえしをしていくというお話です。最後は自分の子供たちまでおかえしにさしだしてしまうのです。面白いのは、お返しの内容だけではありません。おかえしのおかえしのおかえしのおかえしの・・・と、おかえしのやりとりが増えるたびに「おかえし」の言葉が一つずつ加わっていくのです。

この絵本のお薦めポイントは読み方にあります。ただ、ひたすら出てくる「おかえし」をたんと読んで読むでも味わいがあるのですが、一工夫をすると、その口調も含めて心に残ります。その方が楽しい思い出になると思います。ちなみに、読み聞かせをしてくれたお母さんは、この部分を早口言葉のように言うので、私は何回おかえしを言ったか、指折り数えてチェックします。

母にこの絵本が面白かったという話をしたら、さっそく図書館で借りてきてくれ、読んでくれました。母の読み方も独特で、読む人によって雰囲気が変わることがわかりました。母の場合は、ジェットコースターのようにはじめはゆっくり、おわりは特急速度で読みます。またその表情も、壊れたシンバルを打つ猿のおもちゃのようで面白いのです。何度も読んでもらううちに、何かおかえしをしなくちゃ、という時には、誰彼ともなく、おかえしのおかえしの・・・と言うようになりました。家族がみな、この言葉から連想することが同じということです。絵本は、高校生になっても楽しいです。聞いていた時は、よく意味がわからなかったり、それほどおもしろくなかったとしても、違う年齢で読むと、人生の大事なことが書かれていたんだな、と思うことがあります。

私は今、音楽高校に通っていますが、絵本の思い出は音楽の表現にも役立つと思います。例えば、楽しい感じを出す時には、まさにこの、おかえしのおかえしの、を想像しています。悲しみも苦しきも、想像できる絵本があります。それは幸せなことだと思います。外国の話、昔話、戦争の話、環境問題の話など絵本から学んだことは数多あります。この時間は私にとって、「私」を作る上でなくてはならなかった時間だと思います。